

## ◆ビオトープとホタル

夏空のもと子ども達の歓声が響きます。トミヨやドジョウなどの淡水魚、ヤゴやガムシなどの水生昆虫、周辺ではトンボやバッタなどを追い、子ども達は「獲物のあるビオトープ」での小さな狩りに夢中になります。

小学生の自然体験学習は年々増加傾向にあって2014年は海陽小、絵鞆小、高砂小、本輪西小、白鳥台小、知利別小のほか、友の会など数団体の子ども達を受け入れることができました。

ビオトープ・イタンキの計画は1998年まで遡りますが、「ほたるの復活」は象徴的な「種」として重要視してきました。1999年白老で行われた北海道ホタルの会のシンポジウムに参加するなどして知見を積み、2000年虎杖浜地区の野生ヘイケボタルから採卵し人工飼育をスタートしました。



ヘイケボタルの幼虫



ヘイケボタルのサナギ

この間、行政の理解も次第に進み2006年からビオトープの造成が可能となり、2006年秋から2007年にかけて飼育幼虫の放流を行いました。造成したばかりの水辺でしたが順調に定着し発生数も増えてきたので2010年から市民ホタル観察会を呼びかけました。アマガエルの盛大な合唱の中、昼間は見られないドジョウの採餌行動や眠っているトミヨの姿なども見られ、子ども達は「まだ帰りたくないヨ・・・」。

ところが、2013年からホタルの発生数が極端にダウン、観察会も「広報」を中止、餌量の推移など原因の究明にも努めてきました。自然保護団体の協力を得て新たに富岸地区から採卵飼育し、3令幼虫の放流を試みています。異血の導入により遺伝的多様性が増し、イタンキの環境により適応できる個体群の誕生を期待しています。

室蘭地区のヘイケボタルは一度絶滅しています。生息できる湿地の環境が失われたため、その状況は基本的に現在も変わってはいません。ビオトープ・イタンキは人工の水辺ですが、失われた室蘭の湿原をモデルにさらに自然回復を進め、ホタルが安定して生息できる環境を実現したいものです。  
(大西 勲)



発光するヘイケボタル